

勉学の秋

記録的な猛暑だった夏が過ぎ季節はようやく秋。一年のうちで最も過ごしやすい季節であることから、読書の秋、行楽の秋、スポーツの秋、芸術の秋、そして味覚の秋など様々な言葉が冠されます。

秋は学会の多いシーズンでもあって、街の医院に「学会のため休診」の貼紙をよく見掛けるのもこの時期です。

当院の副院長は、予防歯科学の实地研修のため9月末にスウェーデンのマルメ大学に出張します。研修の成果は次号で報告されるかと思いますが、まさに勉学の秋を実感させるイベントです。

歯の豆知識

アンチエイジング

酸化物質

先回、生体は活性酸素から身体を守る防護機構を備えているので必ずしも恐れることはいないと書きましたが、活性酸素の過剰な生成や、あつてはならない場所での生成は、生成と消去のバランスを崩し、結果としてフリーラジカルが生体内の分子に損傷を与えて色々な病気を誘発します。このように「生体の酸化反応と酸化反応のバランスが崩れ、酸化に傾いた状態」を酸化ストレスといい、この酸化ストレスを防ぐのが酸化物質です。

生体の防御機構には、(1)

ひるまだより

2007.09 vol.17



医療法人
ひるま矯正歯科
Hiruma Orthodontic Office

立川市曙町2-9-1 菊屋ビルディング2F
TEL:042-526-3376/FAX:042-528-1102
URL: <http://www.hiruma.or.jp/>

ドキュメンタリー・矯正治療

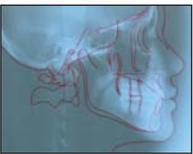
「リムーブ後の検査」

リムーブ後の検査とは
治療開始前の検査は治療計画を立てるために、リムーブ後の検査は行われた治療を確認し患者さんに治療の内容を理解して頂くために必要です。
また、治療開始前に立てた方針と実際の治療にどのような違いがあったのか、それは治療上有利な変化だったのか不利な変化だったのか、治療開始前の予測との違いは何が原因だったのかなどの考察を繰り返す事で治療技術の向上に繋がり、患者さんだけでなく術者（矯正歯科医）にとっても重要な検査です。

X線写真撮影

頭部X線規格写真（セファロ）

側面（側貌）と正面（正貌）の撮影を行います。特に側面のセファロでは初診のセファロとリムーブ時のセファロを重ね合わせる事によって治療前後の変化がよく分かります。



X線写真にトレース用紙を貼り、外形線をなぞります。写真はトレースした側面セファロ。

パノラマX線写真

歯根のパラレリングや顎関節の治療前後の変化を確認するために撮影します。

デンタルX線写真

歯一本一本の状態を確認するためのX線写真です。矯正治療中に発生した虫歯や歯槽骨の吸収があれば確認する事が出来ます。

写真撮影

顔写真

・顔全体の撮影 倍率1/10

口元と顔全体のバランスを評価するため撮影。

・口元の撮影

前歯の位置変化による口元の形態変化確認のため、口唇閉鎖時とリラックス時、またスマイル時の口元アップを撮影します。

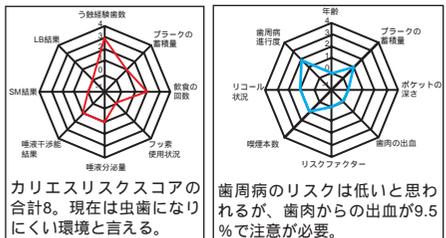
口腔内模型

様々な角度から歯列の形態や咬合状態を確認するために口腔内模型が必要になります。口腔内模型を用いて観察する事により、歯の裏側（舌側）からの咬合状態の確認や上下歯列の正確な位置関係が把握出来ます。

虫歯と歯周病の検査（唾液検査と歯周基本検査）

唾液検査による唾液の性状や口腔内の虫歯原因菌の量、歯周ポケットの状態や歯肉からの出血について、また磨き残しを赤く染め出してチェックします。

各検査結果はリスクの状況に応じて0-3（最もリスクが高い場合スコアは3）までのスコアで評価されます。本症例の虫歯リスクと歯周病リスクは以下のような状態でした。



カリエスリスクスコアの合計8。現在は虫歯になりにくい環境と言える。

歯周病のリスクは低いと思われるが、歯肉からの出血が9.5%で注意が必要。

今号は、治療の変化に伴う当院で行う検査とリテーナー期間中の虫歯と歯周病予防に対する検査について説明します。詳細は10月号

ヒルマトキオのホットニュース

アンチエイジング学会

日本抗加齢医学会（通称アンチエイジング学会）に出席するため京都に行ってきました。抗加齢医学会は、従来の内科や外科、歯科といった診療科目別の学会や、糖尿病やリウマチといった疾患別あるいは腎臓や泌尿器など臓器別の学会と異なり、アンチエイジングという一つの大きな目標のもとに集結した学会なので、会員は医師をはじめ歯科医師、パラメディカル・スタッフ、体育科学系研究者など、横断的な分野から成り立っているのが特長です。アンチエイジングというと、エステやエクササイズ、化粧品、ダイエットなどを思い浮かべる方が多いかと思いますが、学会で論議される内容は極めて学問的で、講師は第一線で活躍する教授クラスの先生たちが務め、それぞれに専門分野における最先端の話をします。加齢を学問的に追究すると究極は分子生物学に至るため、臨床矯正医には理解を超える部分が少ないかもしれませんが、知的好奇心が大いに刺激され、高揚した気持ちで講演に聞き入りました。会員の7割が医師で歯科医師は2割弱という、知り合いのまったくいなかった学会ですが、最近では親しく話のできる先生もできました。ジャンルの違う医師と知り合う機会のあるこの学会は、学問的興味はもとより新しい人的交流の楽しさもあって、早くも来年の総会を楽しみにしています。

「ひるまだより」にアンチエイジングを連載しているのは、抗加齢に歯科の果たす役割が大きいこと、口の中と全身状態は切り離して考えることができないことなどが分かってきたからです。「紺屋の白袴」で、己の反アンチエイジングな生活態度に、いささか欺瞞と後ろめたさを感じています。

活性酸素の発生を抑制する(2)

発生した活性酸素を安定化させる(3) 損傷を受けた分子を修復・再生させる、の3段階の仕組みが備わっており、各段階で酸化物質が酵素として活躍します。

このように酸化物質は体内で分泌される他に、食物としても摂取されます。食品中の酸化物質としては、ビタミンC・E・B2、カロテン(ビタミンA)などのビタミン

ン類、セレン、マンガンなど

のミネラル類、その他ポリフェノール、カロチノイド、コエンザイムQ10などがあります。酸化食物の代表は緑黄色野菜ですが、最近では人工肥料などの乱用で土地が痩せたり、露地物野菜が少なくなると、

必要な成分(ビタミンやミネラル)の量が十分でないものが多くなっています。そのために、不足をサプリメントで補うという考え方が出てきたわけです。